

草津市立矢倉小学校通信 令和2年11月17日 NO.15



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

心が動くやりとりがその世界の魅力へ導く

コロナ禍のため、これまでどおりの校外学習はできない。3年生社会科の工場見学もそうだ。今年はICT機器を駆使した画面越しのパナソニック草津工場見学となった。いわゆるリモート見学である。

「パナソニックの草津工場を空から見るとこうなります。さて、この工場の広さは、みなさんの矢倉小学校のいくつ分だと思いませんか？」アテンダントの小島さんから問いかけられた。教室にいる子どもたちは大きく映し出された工場を見ながら、口々に応えていく。小島さんが教室にいるような雰囲気です。語りかけてくださったものだから、子どもたちはどんどん勢いついていった。そんな教室のようすは、現地工場のアテンダントのみなさんにも見てもらっている。そのため、話を聞きながらメモする子がいると、「今、大事なことをメモしている人がいますね。少し待ってあげましょう。」そんな一言も投げかけられる。と、他の子どもたちは、それにつられてメモをします。こうして、どの子も話を聞きながらメモをする、これが少しずつできるようになっていった。さらに画面を介して、うなずきあったり、楽しんだりすることで、その世界にますます引き込まれていったのである。

子どもたちのようすをもとに、アテンダントが活動を展開させるやりとりには、絶妙なテンポがある。工場内を、カメラを通して紹介してくださる方、こちらからのインタビューを受けてくださる方など、アテンダント同士の見事なチームプレーで、話題がうまく整理されながらのやりとりである。こうして子どもたちは、学ぶべき情報一つひとつを着実に手に入れていくことができた。リモートによる見学は、どこを見るといいか、何をメモするといいのか、一つの画面を介し、みんなの気持ちをそこに集中させることができる。この点で実に効率的だ。教室と工場とに、ある種の一体感が生まれるのである。

実際に工場を訪問させてもらうことのよさはもちろんある。リモート見学との決定的な違いは、臨場感のあるなしだろう。仲間と列をなして歩きながら見学する場合は、その場の雰囲気にたっぴりと浸ることができる。そのため、せっかくの説明が子どもたちにうまく伝わらないこともある。場所によっては、メモをすることもできず、先へ進むことさえ…。しかし、それ以上に言葉にならないものを体感できる、それが実地の見学ならではのよさだ。

リモート見学が功を奏するのは、単なる工場紹介ビデオの視聴で終わらないところにある。つまり、情報が一方通行で提供されるのではなく、アテンダントのみなさんとのやりとりによって、実際に工場を見学しているような心境が子どもたちに与えられるのである。画面を介して、一緒に工場を見て回り、その前後には、説明を途中でとめながら、予想を立てたり、クイズで確かめたりしつつ、学び手である子どものペースで、工場のしくみ、よい製品を生み出す工夫といった情報を整理していくというものだ。そんな「よくわかるための共同作業」が仕組まれているのである。

「パナソニックってすごいなあ。」「かしこい冷蔵庫やなあ。」感心しきったあいづちとともに、こんなつぶやきが聞こえてきた。これまでの社会科見学でも、ものづくりのすごさを感じた子どもたちだったが、今年はこれとはまた一味違う感動が生まれている。実地の見学とバーチャルな見学、そこでの成功の秘訣は、その世界に入り込み、心が動くやりとりができたかどうかということだろう。